

〔論 説〕

近世の礪波地方における神社の広域祭祀圏について

橋 本 征 治

はじめに

わが国における神信仰は、原初的には森羅万象に神の降臨・宿りを観ずるといふシャーマニズムの性格を強くもつたが、古代氏族社会の発展過程において祖先崇拜と結びつき、氏の神信仰は、政治的社会的統合と支配のシンボルとして機能した。統一国家そして律令社会の出現は、「神」を政治的・社会的支配構造の中に位置づけたが、古代社会の崩壊により、この支配体制が衰れ、庄園体制・前期封建社会を経て、武士団の惣的結合、さらに地縁的結合に基盤を求めた産土神信仰があらわれ、それは弘汎な近世村落の成立とともにムラ氏神信仰へと発展した^①。

しかし、近世における祭祀組織はムラレベルにとどまるものではなく、より広い範囲を基盤とした神々神社が存した。すなわち、マチの卓越した政治的・経済的中心性をバックにしたマチの惣社^②、開発単位や水利・山林入会の連帯を基底とした、換言すれば、農民的・農業的な結合を背景としたムラ・ムラの小地域祭祀集団、あるいは水・山・風といった単一機能の神（以下、機能神と呼ぶ）を祭祀する集団などが認められるのである。そこで本稿では、ムラの範囲を超出した祭祀組織が近世の地域構造の中でどのような形をとつ

たのか、その空間的孤がりに重点を置き、主として前記の三形態について考察することにした。なお、いわゆる惣社には、郷（近世）の惣社を唱えるケースが多いので、惣社と郷の関係から、本地域における近世郷の意味についても若干考えてみたい。

一、マチの惣社

近世における郷レベルの惣社を唱える神社（図2）はほぼ各近世郷に認められ、ことに開発の古い山麓地域には、複数の惣社が存在するケースがある。いうまでもなくこうした社位をそのまま信じるわけにはいかない。そこで一つの目安として、明治初期に定められた官幣社・国幣社、格社・郷社が近世における神社の地位を多る程度反映しているのではないかと考えられる。明治三年の神社定則によれば、「郷社ハ凡戸簿一区二祀ヲ定領トス仮令ハ二十ヶ村ニテ千戸許アル一郷ニ社五ヶ所アリ一所各三ヶ村ヲ氏子場トス此社ノ内式内カ或ハ従前ノ社格アルカ又ハ自然信仰ノ掃スル所マ凡テ最首トナルヘキ社ヲ以テ郷社ト定ムベシ」とあり、区または千戸という区域内で、①式内社またはそれに準ずる社格があるか、②近郷の崇拜を集めている最首位の神格であることを条件とした。礪波記（図2）では、郷社として十一社が指定された（その他に国幣小社一、格社一）。そのうち、六社までがマチの神社である。これらのマチの神社は「式内社」ないしそれに匹敵する古社とは言い難く、定則にいう区域内の「最首トナル」神社として指定されたものであるとすれば、これらマチの神社は近世において、近郷一円にかなりの勢威をもつたと考えてよいだろう。ただし、その直接の氏子圏はマチ内部とマチに連坦する隣接材に限られる。また、本地域は真宗勢力の強

いところであるので、以下述べる祭祀空間における地域的・社会的結びつきについても割引いて考える必要があるであろう③。

福光宇佐八幡宮と小矢部川上流地域 宇佐八幡宮（祭神は菅田

別命）は昭和初期には神饌科を大井川以西から蟹谷郷南部に至る一町八八カ村より集めていた（図2）。この範囲は他のマチに先がけて明治六年に郷社指定を受けた同社の近世における祭祀圏とそう大きく隔たることはないだろう。ところが、その範囲内には弘瀬郷の比売神社（高宮村）、吉江郷の日吉社（下吉江村）、延喜式内社の比定されている石黒郷の荆波神社または富士社（岩木村または同

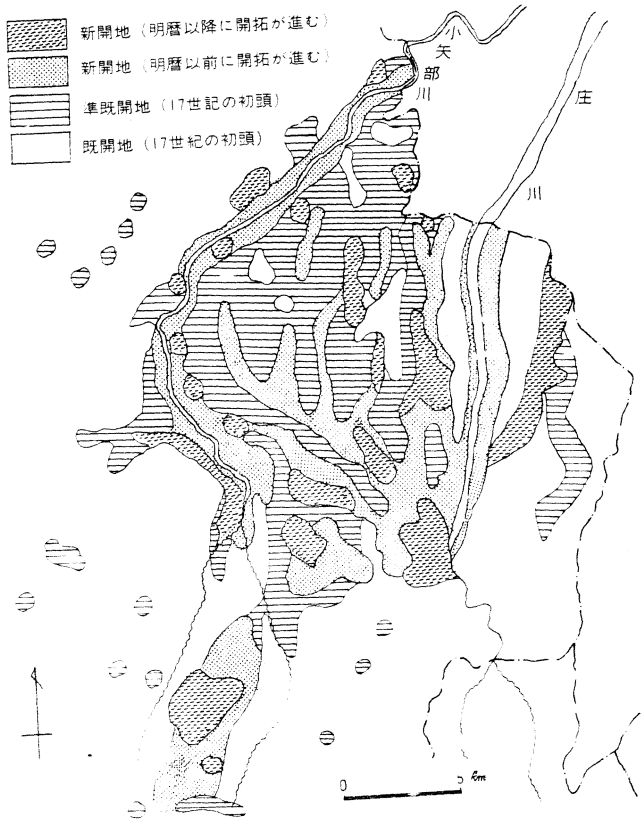


図 1. 磯波地の開発過程

中世の戦乱期には、石黒・福光・院林・太美・直海などの各郷には有力な武士団が活躍し、各氏の惣的結合のシンボルとして、守護神を祭ることがおこなわれた。たとえば、弘瀬郷には一若宮二丁、梅宮一丁、湯沸宮一丁、天満七反、高宮三反、小白山七反一の神田があり（仁和寺文書弘瀬郷田数注進状 宝治二年一一二四八）、

木村）があり、近世においてはその実質をかなり喪っていたが、それぞれ郷の惣社であったと伝えられている。したがって、本地域における近世郷の性格、およびこれらの惣社と宇佐八幡宮との関係が問題となる⑤。

古くから拓かれた小矢部川上流域では、「勤仲記一（治暦元年一一〇六五）の越中国解に一当国往古無レ有二庄園一、而近代之間、所部百姓為レ通一公役二属二権門一而立二庄園一」と、庄園化が進み、弘長二年（一一二六一）の開東下知状（石黒庄弘瀬郷一円宗寺領一雑掌の幸円と地頭の定朝らとの地頭職をめぐる争論に対する裁許状）には、一当時、以山田・広瀬両郷為一庄・石黒上・中・下為一庄、以吉江・太海・院林・直海・大光寺五郷為一庄一⑥と、小矢部川上流のほぼ全域が庄園化されていたと伝えている。その反面、武士団が地頭職・惣追捕職などを足がかりに勢力を伸ばし、庄園の蚕食・進行していたことは当時の数々の訴状よりうかがえる。ここで、「開東下知状」にみえるように庄園が中世一荘一を単位としていたこと、および、永く山田郷には地頭職が設置されなかつた点を指摘しておきたい。

は「素ヨリ社殿修營ノ如キハ古来郷内各村ヨリ釀金ヲ以テス」（神社明細帳）とあり、近隣の惣社がその祭祀圏をある程度堅持したことも考慮されねばなるまい。この観点よりすれば、宮中の比売神社がよくその祭祀圏を保ちえたことに注目すべきかもしれない。

次に、宮島郷に属する福町神明宮^①が何故、糸岡郷惣社を唱えるのかという問題であるが、それは、かつての糸岡郷の中心地木舟坂との関係（天正頃の大地震により木舟城が崩壊し、商人達が今石動方面へ移動し、福町を形成したこと、および同社の主神たる天照皇大神は元祿十五年一七〇二に、旧木舟城主前田秀継の遺臣といわれる四人の町人により伊勢から勧請されたこと）^②、および、行政的には福町は糸岡組に含まれたことによつて説明される。また、この新しい惣社においては、「……郷内ニ係ル臨時ノ祈雨・祈晴・除蝗・祈穰ノ四祭等ハ勿論、近歳ニ至ルマデ、郷内組・許村役人ノ依頼ニヨリ、毎歳ノ五穀豊熟祭執行スルヲ定例トス」（神社明細帳・傍点筆者注）と、その祭祀圏として郷と組とをそうはつきり識別してはいなかつた。（この郷内には、延喜式内社に比定される七社村の長岡神社または五社村の糸岡神社が鎮座したが、その祭祀圏ははつきりしない。少くとも、福町神明宮を凌ぐことはなかつたらう）

以上より、近世の小矢部川中流域では、郡規模の殖生護国八幡宮、近世に確立された郷規模のマチの惣社とその下位に立つ古い惣社、郷規模の祭祀圏を保つ惣社、という祭祀地域構造が確認される。

小結 起源のそう古くないマチの神社が古い惣社といわれる神社

社にかわつて郷レベルの惣社の地位を確立したのは近世においてであつて、その勢威を支えたのは、政治的庇護、マチの社会的・経済

的中心性、マチの財力などであつた。したがつて、マチの惣社祭祀圏とマチ・ムラ圏との整合が考えられるわけで、そのことは福光宇佐八幡宮では認められた。しかし、靈験や社格・由緒を尊ぶ神祇信仰にあつては、祭祀圏は必ずしも政治・経済といった要素のみに左右されるものでないことは当然で、そのことは小矢部川中流域において認められた。なお、祭祀圏の実態とその「地域」としての意味については、福町神明宮のように郷と組の混合もみられるので、検討の余地が残されている。

マチの惣社の祭祀空間は構造的に二つのパターンにわけられる。マチの惣社が郷レベルを越えた領域をもその祭祀圏に組み込み、他の惣社がその実質をかなり喪つていふという小矢部川上流域型で、マチ氏子圏―連坦村の擬氏子圏―複数の旧惣社圏―郷をこえる広域祭祀圏という階層的重層構造を示す。郡レベルの神社が近くにあつて、しかも他の惣社がその実質をかなり維持していたため、マチの惣社の祭祀圏が郷レベルに抑えられ、しかもその結びつきが必ずしも明確でないという小矢部川中流域型で、マチ氏子圏―連坦村の擬氏子圏―旧惣社の祭祀圏―郷レベルの祭祀圏―他の郡・クニレベル神社の祭祀圏、という複雑な階層的重層構造を示す。なお、こうしたマチの神社の広域祭祀は開発の古い山麓のマチに限られ、開発の新しい扇状地や台地上の地域ではみられなかつた。

二、ムラ・ムラの小地域祭祀圏

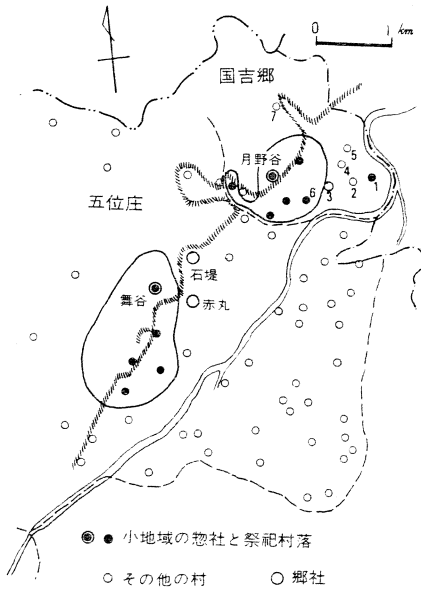
小矢部川下流域の西部には、二つの小地域祭祀集団（村落規模を上廻り、近世郷規模を下廻るもの）が認められる。五位庄（惣社は

浅井神社)内、舞谷村(村社は八幡宮)の下加茂社(図3)は山麓部に連担する舞谷・馬場・加茂(高畠)・鳥倉・西の五カ村の宮として祭祀され、「……此下加茂社祭祀ノ節ハ郷内五ヶ村神輿渡御」

(神社明細帳)がおこなわれた。さて、川人山三社権現鬮鬮由来(12)

によれば、五位庄の「五十三ヶ村ヲ十二郷ニわけ、郷大將十二人御付被為成候」(享保九年越州川人山三社記には「置ニ主使十二人」とある)、そして「宮様より右十二人ノ者共ニ祭祀五十三ヶ村より

入用取立千百くわんと申まつり……」をとりしきらせたのである。この「千百くわん祭」は近世においてもとりおこなわれ、惣社の浅井神社は知識米と称して御供料米を取り立てていたことから、この伝承は事実とそう大きく違っていないと考えられる。だとすれば、中世の五位庄では四〜五カ村よりなる十余の下部単位がおかれたことになる。庄官十二人のうちの一人は鳥倉村に在ったと伝えられるところから、前記の五カ村もそうした下部単位をなしたと考えられる。



- 小地域の惣社と祭祀村落
○ その他の村 ○ 郷社
1. 嶋崎 2. 答野出 3. 上八ヶ新 4. 細池
5. 岩坪 6. 答野嶋 7. 頭川

図3. 小地域祭祀集団

そして、庄園体制の崩壊後においても、こうした地域単位(おそらく、その地域形成過程においては前記の庄官たちが重要な役割を果たしたであろう)が下加茂社を中心とする祭祀行事に残され、それが近世に継承されたのが前述の神輿渡御の行事であろう。なお、舞谷には親王塚・城が平山・観音堂跡・鍛冶屋町などの小字名が残され、また五カ村とも、山麓下位面にある耕地は五位庄用水により灌漑されたことを付け加えておこう。

月野谷村(図3)の見多気神社(祭神は安閑天皇川蔵王権現と小彦名命)は、国吉組(近世郷と一致)の惣社を唱え(神社明細帳)、近世においては「毎年八月七日祭礼之砌湯の花為入用銭」を答野嶋・嶋崎・高辻・月野谷・五十辺・八口・手洗野の七カ村に割符し、「……社殿修葺雑用等ハ右湯ノ花銭ニ割符仕立村」(13)より出された。

何故、この惣社は一部の村々により維持運営されるのだろうか。まず、その社地が七カ村の共有山の一角にあったことから、山の入会関係がその基底にあつたことは確かである。山麓の村々は「……蔵人藤原国義当地ニ下向アリ、荒地ヲ開墾シ田畝ヲ整備シ水路ヲ開設シテ村邑ノ基ヲ開ク」(神社明細帳・傍点筆者注)とあるように古くから拓かれたところで、前記七カ村のうち嶋崎・答野嶋を除く五カ村は国吉用水に属し、頭川・岩坪は別水利で、細池・嶋崎・答野嶋はその中間にある(以上の村は元和五年の利波郡家高新帳(14)にみえる)。

このほか、佐賀野は、近世初頭に宿駅として在ったが、農業的には不安定なところで、元和五年の「新帳」からは洩れており、笹八口は寛永・正保年間にでき、答野出と上八ヶ新は寛文年間の佐賀野

用水の開さくになる新村である。ということは、見多気神社の祭祀集団は国吉用水懸りの古い村々を主体に構成され、他水利や後発の新村は除外されていたことになる。嶋村・荅野嶋については疑問が残るが、この祭祀集団も舞谷他四カ村と同様に、近世以前に山の入会關係と水利の共同をふまえて成立し、その連帯を近世へと継続させ、後から成立した村々を抱擁するに至らなかったと理解される。

寛文年間、山田野台地に新田用水を開さくして拓かれた藩直営の山田新田の細木新村には、「五ヶ村の宮」または「細木堂(図4)」と通称される神明社がある。「山田新田由来」⁽¹⁵⁾によれば、同宮は「細木峠ト申所を惣宮地ニ残シ置宮ヲ建、山田新田開発被仰付候節御納戸銀ヲ以御宮并社地ニハ役棧敷仕立、御祭祀縮方トシテ御割場与御足輕被遣候……」と、新田開発にもなつて藩の肝入りで新田一帯の惣宮として創建されたものである。同宮の五カ村というのは、「猶以村数五ヶ所か六ヶ所ニいたし、家ハ其村領之内ちりちりに見図為立可申候」寛文一三年の条にいう開発当初の新村(実際は細木新・大窪新・大塚新・縄蔵新・赤坂新・天池新の六カ村)⁽¹⁶⁾を指し、その後国広・西山田を加えた八カ村により祭祀され、同宮の「五カ村の祭り」には広く山田新田の村々(水利や山の入会で共同する)より人が出、おのずと惣宮としての地位を占めるに至つた。

こうした開発にもなるものとして、金屋本江村の白山比咩能神社(主神は菊理媛命)がある(図2)。「往古・本村並ニ近郷数ヶ村ノ氏神トナリシ由、中古毎村ニ氏神の鎮齊シシヨリ本社ヲ総社ト唱ヒテ今衆庶帰依セル社ナリ」(神社明細帳)と、村々に産土神信仰が普及する以前は、同社がその近郷一円の総氏神的地位にあつたこ

とを伝えている。礪波地方には白山社の分布は少く、ことに開発の新しい扇状地には、神明社が圧倒的に多く、白山社はあまりみられないのだが、金屋本江に隣接する内御堂・野寺・西中にも白山社があることはある程度社伝を裏付けているのではあるまいか。また、延宝年間に金屋本江村の佐次郎兵衛により拓かれた金屋本江新の氏神は、白山比咩能神社より分祠された。これらのことは、近世村落の自立後も、従前のつながりが古村や親村の氏神への尊崇を継続せしめたことを物語る。

庄川の乱流の河跡が残されて、開発のおくれた扇頂部に立地する古上野村(図3)五カ堂神社も、二万石用水岩武口に属する五ヶ・古上野・高儀新・庄新・筏の五カ村の総社とされている(庄新は宝暦年間に離脱……ただし、その尊崇には変わりがない……神社明細帳)。「古上野と五ヶ(明ヶとあるのは間違いだらう)は「元和五年利波郡家高ノ新帳」に記載された比較的古い村だが、筏は寛永十一(正保三年の間、高儀所は正保と明暦年間に、庄新は延宝と天保年間にできた新村である)ことから、ここでも、古村や親村の氏神への連帯が残されたのではないだろうか。

ともあれ、開発が中世後半から近世にかけて進んだ扇状地には、開発の共同、村々の本末關係あるいは水利の共同を絆とした、換言すれば、農業的・農民的なつながりを基盤とした祭祀の連帯が近世を通じて持続された点は注目される。

以上のように、開拓の古い山麓地域の小祭祀連合は、中世的な郷内の小地域結合を近世に継承したという性格をもつのに対し、開拓の新しい扇状地や台地では、中世末から近世にかけての開発、新村

の成立と深く関係している。そこに、両者の祭祀集団としての性格の相違が予想されるが、今のところ、それを明らかにする資料を欠く。

三、機能神の祭祀圏

フカシドク

不吹堂

庄川町から城端町にかけての南礪の山麓一帯では、春三・四日頃に局地的強風、いわゆるフェーン風が吹くことが多く、時には風速二〇メートルを越すこともあり、古来、南礪山麓の人々はこの突然の強風に苦しめられてきた⁽¹⁷⁾。井波町周辺の記録に残る大被害をざっと拾いあげても、宝暦九年（一七五八）の井波大火・北田・井波・山見・松嶋が全焼、同十二年二月大風、四月大火、寛政二年（一七九〇）、同七年、文化十一年（一八一四）、そして明治十二年、同四十三年の細野・井口の大火と枚挙のいとまがない。そこで古くより、この地域の村々では、五穀豊穰・安全を祈って、この大風を鎮めんがために、不吹堂と呼ばれる風神堂や級長戸辺神社（祭神は志那都比古命・志那都比売命）を建てることがおこなわれてきた。これまでに十三の不吹堂が確認されている。これらの不吹堂には一村だけのものもあるが、数ヵ村によつて共同祭祀されるものが多い。

文政五年（一八二二）、井口地方は冷・旱害と秋の台風により大凶作であった。そこで、井口郷の東西原・川上中・蛇喰・井口・宮後・池尻・久保・田屋・山見郷の江見・安清・森清・三清・雨潜の十三ヵ村が寄合ひ相談の結果、風除けと雨乞いのため、翌六年天摩山の頂に祠を建て、不動明王を祭った⁽¹⁸⁾。これが川上中の不吹堂、

である（図4）。これらの村々は、赤祖父川の水郷に属する。その中核をなした赤祖父郷の村々は宏大な郷中入会山を共有し⁽¹⁹⁾、村々の連帯の絆が非常に強い地域であったが、郷中の池田・石田の両村がこの祭祀集団より抜けている。それは、この両村が赤祖父水郷に属さなかつたためと考えられる。というのも、その後三清・雨潜の両村がこの不吹堂の祭祀集団より脱落していったのも、近代に入つて両村が山見八ヶ口用水より引水するようになって、赤祖父川より取水する必要が乏しくなった。すなわち、実質的には赤祖父水郷より脱落したことに原因するからである。これより、この祭祀集団が「郷」領域を基盤に、水利の連帯を主要な契機とし、山郷の連帯により強化された集団であることがわかり、この不吹堂が水神と風

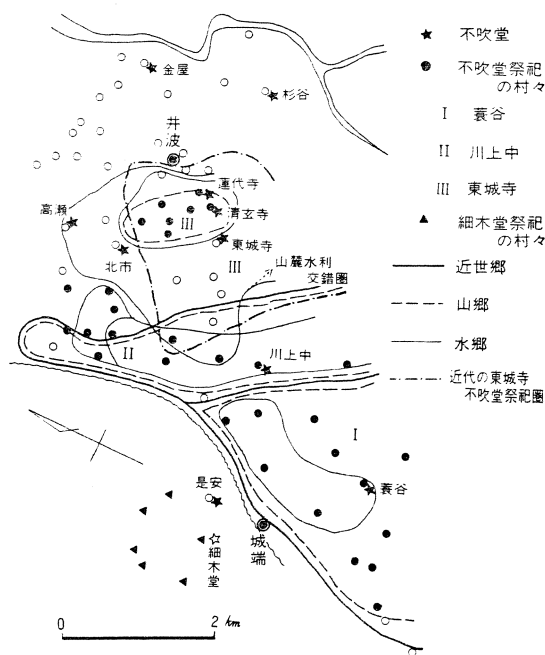


図4. 南礪の不吹堂祭祀圏

神という両面の性格を持つことが首肯される。この祭祀集団の中核をなした赤祖父水郷の村々が単に機能的・一面的な絆によつて結ばれた集団としてではなく、より統合的の性格をもつ集団として、井波・城端という大きな町にはさまれながら、近世はもちろん、明治前期のめまぐるしい行政区画変遷過程を経て現在に至るまで、その行政的・経済的・社会的の一体性を堅持した一因として、こうした共同祭祀も重要な役割を果たしたのであろう。

城端西南部、蓑谷の慈雲神社(図4)は蓑谷・細野・西明・正谷・大鋸屋・新泉沢・理休・林道・北野三ヶ(長楽寺・次郎丸・吉松)の九カ村により祭祀され(神社明細帳)、その領域は能美郷と一致する。さて、山林に関しては、北野三ヶ・西明・細野・蓑谷の入会山をはじめ、村落間で複雑な入会関係があつて、近世初頭(天正十七年に蓑谷と北野)以来、しばしば山論が繰り返されてきたが、こうした村々の入会関係の紛争は、前田氏入封(天正十三年)とともに、中世においては郷中入会山であつた山林に対して、札山銭が課徴されるようになり、郷中入会山が村々または一村に分割・帰属せしめられたことに由来すると考えられる。前記の天正年間以来の北野・蓑谷両村の係争に対して、寛文九年(一六六九)、十村の命により、林道村他十カ村の肝煎が仲裁に入つて両村を和解せしめたが(20)、この十一カ村とは、能美郷内の村々であり、そこにかつての郷的連帯が存続していたことがうかがえるのである。水利面でも池川筋の北野・蓑谷・理休をはじめ、村々の水利関係は交錯していた。したがつて、郷的領域を背景に「山」と「水」の関係を交錯させた村々の精神的紐帯の上に慈雲神社が成立していたといえよ

う。

井波の西方、東城寺の奥の七村山の不吹堂は、蓮代寺・清玄寺・戸板・五領・今里・谷・川原崎の七カ村により祭られる(図4)。この不吹堂の由来は不明であるが、近世初頭にはこれら七カ村は西大谷川の水郷(山見村も属する)を形成し、また七村山と称する広大な入会山を共有していた。したがつて、これらの村々は、水と山の連帯を基盤とした集団といえよう。現在では祭祀集団は拡大され、南山見地区の村々に地区外の久保・池田・山見の三部落を加えて、毎年六月一八日に「カザボシ」祭りがおこなわれている。この拡大された領域は水利関係圏(図4に示したように、山麓小河川水利で七カ村と複雑に結びついている)と、行政区画には浮重なる。なお、明治初年に清玄寺村にかつてあつた不吹堂を再興したのもこの拡大された領域の村々(久保を除く)であつた。

風神の祭祀集団が行政区画に拡大再編されるのが、より明確にあらわれるのは、城端の南方、是安の級長戸辺神社(図4)である。社伝によると「延宝三年八月本神社ヲ創建セリ其後元祿十五年迄信徒村数百八十余村、毎年三組総代出張祭典執行天明二年六月本殿再建明治三年迄六組より(信徒戸数一万余)組総代明治六年迄区総代出張祭典及宮繕一切事務取扱ニ従事セリ……」といわれる。また一説には、野尻村の十村、六郎左衛門が大西村伊藤喜伝次・三清村武部与次兵衛の両十村らと相談のうえ、寛文二年(一六六二)に強風地帯三十カ村の鎮守として創建したともいわれるが(21)、喜伝次は十八世紀中頃の人物、与次兵衛が山田組肝煎を勤めたのは寛文十二年、延宝三年であり、寛文二年頃の山田組十村は井波村加兵衛である。

したがって、時間的に三者が同席することは考えられない。両説を勘案すれば、十七世紀後半に山田野周辺の村々の守護神として創設され、その後その信仰圏が三組（おそらく山田組・井口組・太美組・山見組のうち）、さらに南礪帯の六組へと拡大されたものと解釈される。ともあれ、この神社の場合、行政区画をベースにした十村主導になる祭祀集団を形成し、しかもその範域は他の不吹堂の祭祀圏をも抱摂する「惣」風神の性格をもった点が注目される。

金屋岩里村の不吹堂はその領域は確然としないが、かなりの広域を基盤としたと考えられる。文政十二年（一八二九）、「近年打続大風御座候而、立毛作難仕、近郷之百姓中甚迷惑至極仕候ニ付、不吹堂相建申渡奉好、風下村々^エ示談納得之上……御祈禱人用並地平均人足賃等夫々割符仕候処……」⁽²²⁾（傍点筆者注）と、金屋黒村・井波町・北川村の役人たちが割符分を負担しないという高瀬村の説得方を十村に願出している。図4をみればわかるように、この四カ村を含む範域はかなり広く、十村組（山見組）あるいは近世郷（山見郷と高瀬郷）が想定される。

これらの他に、庄川東岸には、二ッ屋村他九カ村の不吹堂があるが、これはあきらかに庄下郷の川東の村々の連合である。高瀬村・北市村・蓮代寺・杉谷の各村にも不吹堂がある。

以上のように、この地域の不吹堂の基本的性格は、まずなによりも風害を怖れ、五穀豊穰を祈願する農民たちの信仰の象徴であったという点にある（町も加わっていたが）。だからこそ祭祀連合は水利集団や山の入会集団と重なり、また単に風神としてのみならず、水神としての性格をも合わせ持ったわけでもある。時に、そうした

地域には強固な地縁的集団が形成され、しばしばその範域は近世郷域と整合した（七村山・川上中・蓑谷・二ッ屋他九カ村の各不吹堂）。改めて、われわれはこの地域における「近世郷」の「地域」としての有意性に注目しなければなるまい。この地域は直接的に頭れる地域というよりも、歴史的基盤として、他の諸事象を介して顕現する「地域」であるといえる。いま一点は、近世の中頃より十村らの指導により、郷より拡大された行政区画としての組を基盤とする風神があらわれ（是安の級長戸辺神社、金屋の不吹堂）、風神祭祀集団が拡大・再編されたことである。

水神と山神　古来、人々は水を治めるために力を合わせてきたが、大旱魃がこうした努力を水泡に帰した。そこで、人々は水神を祭り、水霊を鎮め、守護を祈願した。そうした水神社はこの地域にも数多くみられる。とりわけ河川沿いや合流点の上・下流域に多い。そうした水神社には、水系地域、また水利連合の村々により祭祀される神社も多い。たとえば、庄川流域⁽²³⁾では、庄川が平坦部へと出かかる東岸部の庄金剛寺村にある元雄神社（俗に弁才天）は庄川より取水する諸用水の総守護神として古くより崇められており、前者の例といえよう。文政十二年に庄川西岸の金屋岩黒村に再建された（寛政年中まであったのが流出と記録されている）野尻岩屋口用水の守護神として井堰神社や、東岸の三合村にある三合新用水の守護神としての宇賀社などは後者の事例である。

村々入会山の守護神を祭る事例としては、福光町西部の山地の字峰山に鎮座する春日社がある（字葉山の火宮社がそうであるともいわれる）。同社は西勝寺・松本・遊部・川合田・定龍寺・八幡の六

カ村入会山の守護神として祭祀されている。山の神や火の神を祭る神社をざっと探せば、吉江中（大山津見命）、沖・西明（火結神）白中村・千福（武甕槌命）、和泉・砂子谷・香城寺（木花開取姫命）など、山麓・山間の村々に見い出される（入会山をもたない扇状地の村々にはあまりみられない）。こうした地域では、入会関係を通しての氏神連帯がかつて存したと思われるが、当地方では郷中入会山や村々入会山の多くが、近世前期に解体していったため、こうした連帯も早くに薄れてしまったようである。近世における実態を極めたい。

むすび

近世の礪波地方におけるムラを越える広域な祭祀圏をもつ神社・祠について、その祭祀集団の性格・圏構造・地域性などについて考察した結果、次のようにいえる。

近世におけるマチの諸中心機能の発達は、マチの惣社の地位を高め、その祭祀圏を広域化させたが、その祭祀圏は必ずしも明確に頭れるという性格のものではなかった。それに対して、ムラの小地域祭祀圏や機能神の祭祀圏はすぐれて農民的・農業的連帯に基づく明確な地域としての性格をもった。ことに、開発の古い地域のそれは、歴史的領域としての郷（近世……中世の郷・庄との連続性はかなり高い）をふまえた領域をとるケースが目立った。礪波地方における近世郷は、単なる形式地域にとどまるものではなく、他の事象を介して頭れる潜在的な地域、あるいは精神的な地域といえよう。ただし、近世後半になると「組」を基盤としたり、十村の主導による

祭祀集団が頭れたことも指摘しておかねばならない。礪波地方全体の広域祭祀圏の構造は階層的・重層的構造を示すとともに、既開地域と新開地域とは、地域差も認められる。残された問題として、広域祭祀圏の内部構造、ことにマチの惣社の祭祀の実態、マチ・ムラ以外の惣社の検討などがあり、さらにムラ氏神や寺と神社との関係なども検討されねばならない。今後、こうした面の解明に努めたいと思う。

本稿の作成にあたっては、諸神社、富山県立図書館、富山大学に資料閲覧の便宜を与えていただき、また、関西大学の福尾猛市郎先生、大阪市立大学の服部昌之先生に御教示を頂いたことを記して感謝します。

注

- ① 吉井良晃『神社制度史の研究』一九三五、一七―一七頁
- ② 惣社は、古くは一国の一ノ宮を指したが、郡・郷などの地域の最首位の神社をも指すようになった。ここでは広い意味で使う。マチの惣社という時は、マチに立地する惣社の意味である。佐伯有義『神祇全書』第二輯、一九〇七、参照
- ③ 山中寿夫「幕藩体制下における真宗寺院と安芸門徒」、小倉豊文編『地域社会と宗教の史的研究』一九六三所収、一二七―一五六頁
- ④ 宇佐八幡宮記録（宇佐八幡宮蔵）
- ⑤ 金田章裕「礪波平野における中世開発と表土との関連についての若干の考察」『人文地理』二二―四、一九七〇、四八―六五頁

- ⑥ 福光町史編纂委員会『福光町史』上一九七一、一九三〇五頁
- ⑦ 前掲⑥、二七六と二七七頁
- ⑧ 拙稿「近世礪波地方のマチ・ムラ地域について」『人文地理』二六一一九七四、一九七四、三〇〇五七頁
- ⑨ 富山県『神社明細帳』一九四二、以下の引用は、文中で神社明細帳とする
- ⑩ 明治神社誌料編纂所『明治神社誌料』中、一九二二、五四頁
- ⑪ 小矢部市史編纂委員会『小矢部市史』上、一九七〇、八三頁
- ⑫ 福岡町史編纂委員会『福岡町史』一九六九、二八二と二八四頁
- ⑬ 京谷準一『国吉小史』一九六五、六五〇頁
- ⑭ 高島幸吉『礪波町村資料』一九三一、一〇一八頁
- ⑮ 福光図書館蔵
- ⑯ 坂井誠一『山田新田用水史』一九六四、六八頁
- ⑰ 井波町史編纂委員会『井波町史』上、一九七〇、三三〇三六頁
- ⑱ 井口村郷土史研究同志会『井口村伝説史話』一九七四、七四と七五頁
- ⑲ 郷中山割定書并山割帳、院瀬見村区長文書（院瀬見区長蔵）
- ⑳ 城端町史編纂委員会『城端町史』一九五九、四二九と四三四頁
- ㉑ 前掲（一七）、一四〇一五頁
- ㉒ 井波町史編纂委員会『井波町史』下、四二九と四三〇頁
- ㉓ 庄川合口用水史編纂委員会『庄川合口用水史』一九六七

A Historical Approach to the Structure of Wider Areas of Shrine Worshipping in Tonami

Seiji Hashimoto

This article is an attempt in which the structure and the strucshrine worshipping are analyzed in terms of Soja (major shrine) and Hokora (small shrine) people in a number of villages worship in Tonami in the Edo Period. The outline of this study is as follows:

1) Soja, situated in machi (town) and worshipped by people in wider areas than the machi, had been developed by the support of the feudal lord and theeconomic prosperity of the machi in the Edo Period. The range of areas, however, is not always defined.

2) Soja and Hokora in rural areas have been established and maintained by villages which, by cooperating mutually, wish their agricultural success. The areas in the early developed region are basically found within the limits of Go.

3) The structure of wide areas of shrine worshipping in Tonami was hierarcal and complicatedly stratified.